

日本語における語用論的表現の発達について

—普通児と自閉児の比較を通して—

樋口 理恵*・林部 英雄

On the acquisition of the pragmatic expressions in Japanese
—Comparing normal and autistic children—

Rie HIGUCHI Hideo HAYASHIBE

1. はじめに

最近、言語発達研究の分野では言語の機能の側面が中心的話題となりつつある。ここでいう機能とは形式と対になる概念で、例えばある語が何を指し示しているかとか、どのような文脈ないしは状況のもとで用いられるはずかといった、ことばとそれをとりまく環境との関係のことだと定義できるであろう。例えば、

1. ヨゼフはマリアを愛した
2. ヨゼフはマリアに愛した

で、1.は日本語の普通の文と認められるが、2.は認められない。このことはことばの形式の問題であって、機能の問題ではないといえる。これに対して、

3. ヨゼフは誰を愛したんだい？
4. ヨゼフが愛したのはマリアだ
5. マリアを愛したのはヨゼフだ

4.5.の文は両者とも独立した文と考えるなら日本語の文として普通のものであるが、3.の問いに対するこたえとして、4.は適当だが、5.は内容的に正しいにもかかわらず不適當である。これは4.ないし5.が語られる文脈と関係があるわけで、機能の問題であって、形式の問題ではないと言えよう。このような言語の機能の側面を扱う分野は語用論と呼ばれる。そこで本論文ではこの語を用いることにする。

言語の習得についても形式の習得と機能の習得は分けて考えなければならない。特に障害児に対することばの指導等では従来正しいことばの形式を教えることに重点が置かれがちであったが、最近では機能面を重視した指導法も徐々に増えてきている。そのような状況で求められるのは、ことばの機能の枠組みを明確にすることや、普通児の発達の様相を明らかにすること、及び障害別の言語機能習得の特徴を探り出すことなどであろう。

さて、自閉児と呼ばれる子供の多くは、何らかの形で言語に障害をもっている。全く音声を出さない自閉児もいるが、ことばを話す自閉児の場合でも、その多くが、単語は習得

*横浜訓盲学院

してもその使い分けに問題があり、他人との会話の際に、そのことばを話すことができない。記号としての言語は獲得できても、対人交流のうえで価値をもつ言語が伸びてこないのである。

自閉児の言語については、Kanner(1943)が「早期小児自閉症」(Early Infantile Autism)として報告した11の症例の中でもあげられている。Kannerの報告の中では、

- a) ことばの発達遅滞
- b) 繰り返し言語
- c) 独り言
- d) 緘黙
- e) 反響言語
- f) 無応答
- g) 抑揚とアクセントの欠如
- h) 人称代名詞の逆転, 即ち1人称と2人称との混同
- i) 不適切で隠喩的な言語—ただ似ているというだけで, 他の意味を表す隠喩的表現をしたり, 意味の転換がなされたりする。

などが記載されている。

その後の研究でも, Savage (1968) が Kanner が報告したことに加えて, 構音障害が自閉児に多く認められるとしており, また, Hintgen ら (1972) も, Kanner があげたエコラリアなどの他に, 疑問文や伝達文が欠如している, 命令文を使うことが多い, ほとんどジェスチャーを使わない, また他人のジェスチャーの理解が悪いなどのことを記載している。

また, 言語面において, 普通児や精神遅滞児との比較研究もいくつか行われており, Rutter (1966), Cunningham (1968) らの研究がそうである。比較研究の1つとして Wing (1976) は普通児, ダウン症児, 受容性失語症児, 発語性失語症児, 弱視・難聴合併児の言語と自閉児の言語とを比較し, 自発語の発達の全般的な未熟, 失語は先天性受容性失語と共通するが, 直接的反響言語と遅延性反響言語は自閉症に特徴的であるとした。

このように注目されてきた自閉児のエコラリア・主客転倒・独り言などの言語は, いずれにおいても, 対人機能の面からみると極度に貧弱であり機能を欠いている。しかし, 対人機能以外の面ではどうだろうか。例えば, 母親に叱られると思った時にその子が「ごめんなさいと言いなさい。」と言ったり, ジュースを飲みたいと思った時に「ジュースをあげる。」と言ったとする。このような例は自閉児に間々みられるが, これらの発話は, その状況においては明らかに不適切である。しかし, 1文だけとりあげてみると「ごめんなさいと言いなさい。」にしても「ジュースをあげる。」にしても, 統語の面での誤りはない。他にエコラリア・独り言等についても同じような傾向がみられ, 自閉児の言語は, 統語論・意味論においてよりも, その発話の状況・環境が関係する語用論において, 大きな障害があると考えられる。

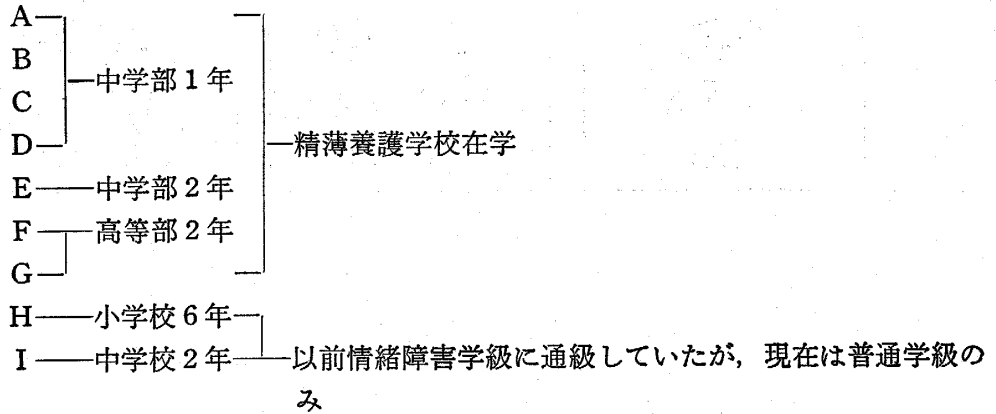
語用論的表現の中にも, 前提や新・旧情報・視点などいくつかの要素があるが, 本研究では, 特に新・旧情報に焦点をしぼり, 普通児と自閉児を対比させながら, 語用論的表現

の発達について考察していくことを目的とする。

2. 方 法

(1) 被 験 者

- ・自閉的傾向を有する児童・生徒 9名 (男子のみ)



- ・普通児及び普通成人

| | |
|-----|------------------|
| 幼稚園 | 33名 |
| 4歳 | 10名 (男子5名, 女子5名) |
| 5歳 | 13名 (男子6名, 女子7名) |
| 6歳 | 10名 (男子5名, 女子5名) |
| 小学校 | 25名 |
| 低学年 | 8名 (男子5名, 女子3名) |
| 中学年 | 9名 (男子4名, 女子5名) |
| 高学年 | 8名 (男子2名, 女子6名) |

成 人

大学生及び大学院生 10名

(2) 刺 激

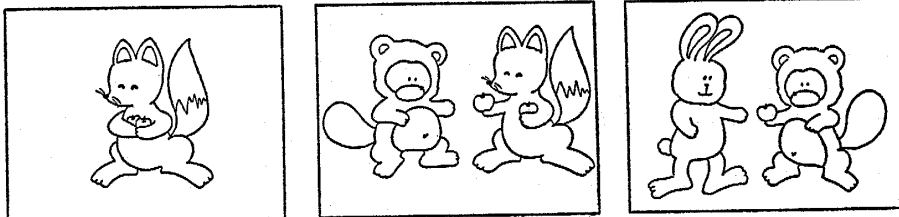
3枚1組の絵カード, Aグループ3組・Bグループ3組, 計6組(18枚)を使用した。

- ・Aグループ

2から3に移る場合, 旧情報がかわってしまうもの。

(2ではタヌキが新情報でキツネが旧情報であるが, 3になるとタヌキが旧情報となる。)

A-1

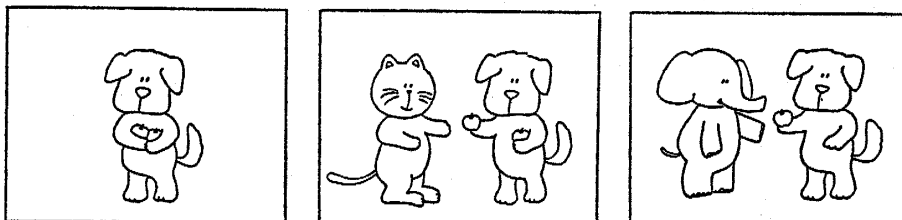


・ Bグループ

旧情報が2でも3でも同じもの

(1で登場したイヌは, 2においても3においても旧情報である。)

B-1



(3) 手続き

「これから3枚の絵を見せます。その絵を見て, 自分で好きなようにお話を作ってください。」などの教示を与え, 1枚ずつ絵カードを提示した。その際, 2枚目に移る時には1枚目は見せず, 被験者が見る絵はいつも1枚ずつということにした。実験は実験者と被験者の1対1で行い, 発話を録音して, 後ほどテープから転記した。

(4) 分析

a) 「ハ」と「ガ」の現れ方

「ハ」と「ガ」の使われ方の違いについては, これまでに様々な議論が行われてきているが, 談話において通常「ハ」を伴う名詞句は旧情報を表し, 「ガ」を伴う名詞句は新情報を表すとされる。

b) 語順

文中の語順は, 旧情報を表す要素から, 新情報を表す要素へと進むのを原則とする。

c) 省略

省略は, 旧情報を表す要素から, 新情報を表す要素へと順に行う。即ち, 新情報を省略して, 旧情報を表す要素を残すことはできない。(久野, 1978)

d) 視点

談話に既に登場している人物に視点を近づける方が, 談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である。(久野, 1978)

その視点を判断する基準としては,

1) 主語になっているキャラクター (人物)

一般的に言って, 話し手は, 主語寄りの視点をとることが一番容易である。目的語寄りの視点をとることは, 主語寄りの視点をとるより困難である (久野, 1978)。

2) 視点動詞

「ヤル」 —
「アゲル」 — 主語寄りの視点をとる
「モラウ」 —

a 私は太郎にりんごをあげた。

b *太郎は私にりんごをあげた。

「クレル」——与格目的語寄りの視点をとる

a *太郎は私にりんごをくれた。

b 私は太郎にりんごをくれた。

3) 「来ル」「行ク」

話し手が動く主体でない場合に

「来ル」 動作の起きる（起きた）時点に到達点にいる（いた）人に話し手の視点が接近している時用いられる。

「行ク」 その他の場合に用いられる。

a 太郎が私に会いに来た。

b *太郎が私に会いに行った。

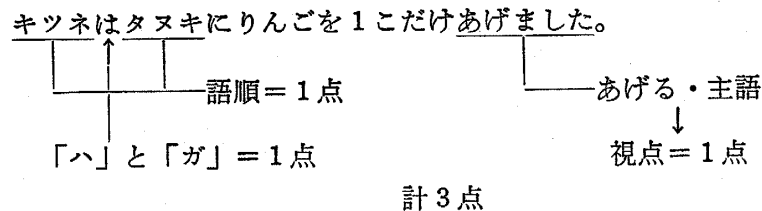
この3点から視点を判断するが、新・旧情報が正しくとらえられていれば、Aグループでは1と2でキツネ、3ではタヌキに視点がおかれ、Bグループでは一貫してイヌに視点がおかれることになる。

以上「ハ」と「ガ」の使われ方・語順・省略・視点の4つの手掛かりを中心に分析を行った。

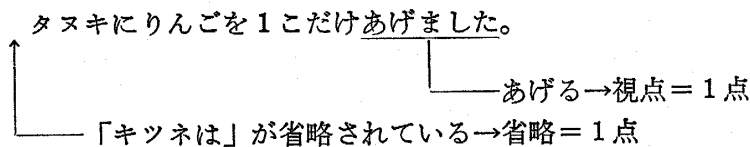
3. 結果と考察

前に述べた手続きにより、各々の文を分析の基準（「ハ」と「ガ」・語順・省略・視点）に照らし合わせて、数値化することにした。

a. 省略がない場合



b. 省略がある場合



この場合、「ハ」と「ガ」・語順について得点を与えることができないため、aの場合とつり合わなくなってしまう。そのため、bの場合は、省略と視点が正しく使われており、全体に適切と考えられる文については計3点を与えることにした。

ただし、各組の1枚目の絵については、いずれもキャラクターが1つだけなので、パンダが立っています。

イヌが一人ぼっちでさびしそうです。

などの文が考えられ、この文では語順や省略については判断できないので、「ハ」と「ガ」

表1 年齢グループ別平均点(素点)

| | | | |
|-------|------|-------|------|
| 4 歳 | 16.9 | 自閉児 1 | 3.9 |
| 5 歳 | 24.3 | 自閉児 2 | 36.5 |
| 6 歳 | 25.8 | | |
| 低 学 年 | 28.6 | | |
| 中 学 年 | 34.4 | | |
| 高 学 年 | 35.1 | | |
| 成 人 | 40.8 | | |

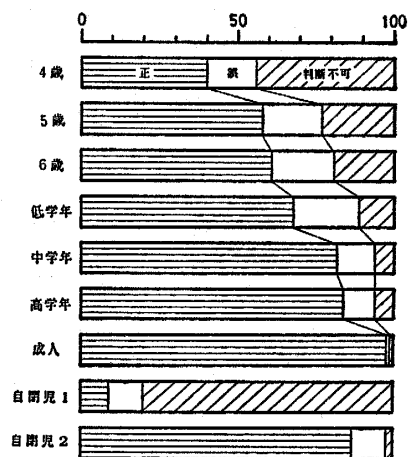


図1 各年齢における正反応, 誤反応, 及び判断不可反応の割合

の1点にしぼることとする。

したがって, 1組のカードで満点の場合, 1で1点, 2で3点, 3でも3点の合計7点とることになる。全部で6組あるので7点×6=42点で, 1人の最高点は42点となる。

このようにして得点化し, それぞれの年齢グループの平均を出したものが表1である。ここで, 自閉児1というのは, 対象児のAからGで, 自閉児2というのは, 対象児HとIのことである。自閉児については, A~GとH・Iとではかなり違った反応を示したので, 2群に分けて考察を進めていくこととする。

図1は, 6組の絵カードについての反応の全体的な結果である。ここで「正」というのは42点満点中の得点できた割合であり, 「誤」というのは, 判断基準からいって明らかに間違えているものである。また, 「判断不可」というのは, 幼児に多い例で,

パンダ風船もっているの

といった場合, 助詞がないために「パンダが」か「パンダは」かの判断ができないので, その割合を「判断不可」とした。

(1) 普通児における新・旧情報

図1からもわかるように, 普通児においては, 年齢が上になるにつれて得点率も高くなるが, 小学校高学年でもまだ完全とはいえない。

a) 「ハ」と「ガ」

図2は, 助詞「ハ」「ガ」が使われた場合の正しく使用された率を, 1枚目・2枚目・3枚目の絵のそれぞれに分けて示したものである。

ここで正答とは,

1枚目——「ガ」

2枚目——旧情報を表すキャラクター+「ハ」

3枚目——

のことである。

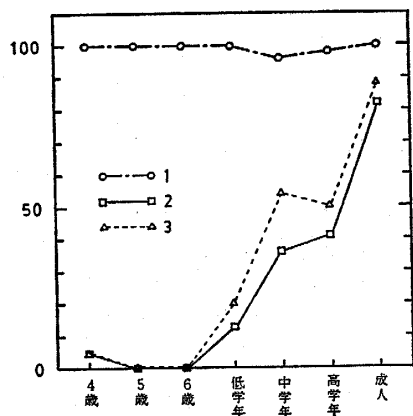


図2 助詞「ハ」と「ガ」の正答率の年齢的推移

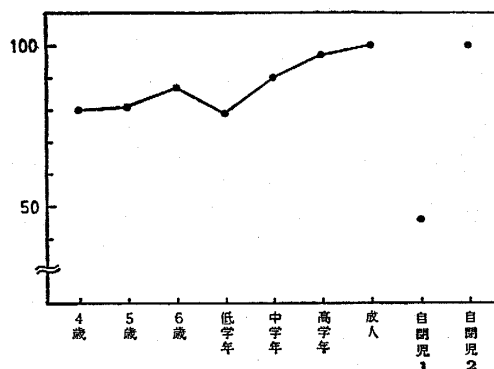


図3 語順の正答率の年齢的推移

図2から、1枚目の絵では年齢を問わず正答率が高いのに比べて、2・3枚目の絵では年齢によってかなりの差がある。2・3枚目の絵では、旧情報が主語となるために「主語+ハ」が正答となる。しかし、幼児などは「主語+ガ」のみを全体を通して使用してしまい、2・3ではほとんど得点できなくなってしまうからである。「主語+ハ」の使用が幼児ではほとんどできないというのはこのグラフからも明らかであるが（幼稚園児33名中「ハ」を使用したのはわずかに1名だった）、小学生でも学年が上になるほど正答率も高くなってはいるものの、高学年になっても50%前後である。しかし、小学生以下でも旧情報を主語としている文が多いことから、新・旧情報は意識されているようである。

林部（1979）は、助詞「ハ」「ガ」による新・旧情報の弁別は小学校レベルでは完全ではないとしているが、更にこの逆の、新・旧情報によって「ハ」「ガ」を使い分けるといっても小学校レベルでは完全ではないといえる。

b) 語 順

図3は、対象児の発話の中に、新情報・旧情報の両方のキャラクターが含まれていた場合、旧情報→新情報という語順の正答率の年齢的推移を示したものである。「ハ」と「ガ」については年齢的にかなりの差があったのに対し、語順では、4歳児でも80%と高い正答率だった。これらから特に幼児は、新・旧情報を表現する場合、語順に頼るところが大きいと考えられる。

語順でも「判断不可」というのがあり、旧情報であるキャラクターを敢えて省略するという場合は、もちろん判断できないのだが、幼児では省略によるものを除いても尚「判断不可」が全反応の

4歳 18% 5歳 12% 6歳 11%

あった。「判断不可」の例をあげると、

握手してるの

りんごあげてるの

などであり、いずれも主語だけでなく与格目的語も現れていない。このことは「判断不

可」とされる文全部に共通であった。与格目的語が新情報の場合（この実験では“やりもらい”の関係を含むものはすべてそうなのだが）、与格目的語を省略してしまうと、聞き手には正しい内容が理解できなくなってしまう。そのような省略をしてしまう幼児の発話は自己中心的なものであるといえよう。この点に関しては、次の省略の項で述べる。

c) 省略

「ハ」と「ガ」の項でも述べたように、幼児ではほとんど「主語＋ハ」が使われていなかった。それでも1文満点の3点を少ないながらとっているのは、「ハ」や「ガ」が問題となる主語の省略を行っているからである。「満点文全体における省略による満点文の割合」をみると、

| | | | |
|----|------|-----|-----|
| 4歳 | 80% | 低学年 | 93% |
| 5歳 | 100% | 中学年 | 49% |
| 6歳 | 100% | 高学年 | 56% |
| | | 成人 | 43% |

となり、低学年以下では「主語＋ハ」での満点はわずかしかない。大野（1975）は、述語だけが述べられている場合は、省略された部分に助詞「ハ」が使用されていると考えてよいとしているが、低学年以下の場合は、主語が現れている文から考えても「主語＋ハ」が省略されているとは考えられない。また、省略全体に占める不適切な省略の割合も、

| | | | |
|-----|-----|-------|----|
| 4歳 | 30% | | |
| 5歳 | 18% | | |
| 6歳 | 17% | | |
| 低学年 | 17% | 中・高学年 | 3% |
| | | 成人 | 0% |

と、低学年までは多くなっている。

※不適切な省略

A-1で考えた場合

1. キツネがりんごをもっていました。
2. タヌキに1こ分けてあげました。
3. ウサギに1こ分けてあげました。

2で省略されているのは「キツネは」だと判断できるが、ここで問題なのは3についてである。3で省略が行われると、普通ならば、主語になるのはキツネだと考えられる。しかし、絵カードではタヌキが主語になるべきところなので、Aグループの場合は、3枚目の省略はすべて不適切な省略であると考えられる。

以上のことから、低学年以下の場合、省略するか否かは、新・旧情報によって左右されてはいるものの、全体として省略が多過ぎ、自分ではよくわかっている、相手に伝えるのには不十分という文が目立った。

d) 視点

視点については「判断不可」がやはり小学校中学年までは見られたが、明らかに誤反応であるというのは、他の3つの分析基準の誤反応に比べて少なかった。これはA-1・A-2・B-1・B-2は、やりもらいの関係が含まれている絵なので、「アゲル」という

視点動詞が多用されているためと考えられる。しかし、風船にしてみりんごにしても、まだあげる側（旧情報であるキャラクター）が持っている状態の絵である。直観的には「アゲル」「モラウ」の使い方として、「アゲル」は物の移動が起こる前の状態を表すのに使われ易く、「モラウ」は移動が起こった後の状態を表すのに使われ易いと思われる。そのため、話の前後関係を抜きにしても「もらっているところ」というより「あげているところ」ととらえられがちだという可能性がある。そうだとすると一概に視点については誤りが少ないとはいえないが、このことについては今後の研究にまたなければならない。

「判断不可」の内訳を見てみると、A-3・B-3での

パンダとライオンが握手をしました。

イヌとネコが手をつないでいます。

といった“一と一が”パターンが大半を占めていた。この“一と一が”パターンでは、メインになるキャラクターがどちらなのか判断できない。視点の決定ができないというより、新・旧情報を意識していないために、どちらも対等に扱ってしまうとも考えられる。ちなみに、“一と一が”パターンは成人では1つも現れなかった。

(2) 自閉児における新・旧情報

a) 自閉児1 (A~G) について

図1で自閉児1の得点率はわずかに9%であった。この値は幼児と比べてもかなり低い値である。残りの91%の大部分を「判断不可」が占めているのだが、実際の発話を基に、なぜ「判断不可」になってしまうのかをみていくことにする。対象児A~Eについては、自発的な発話においては「えりちゃん来るよ」「かぎかけて、電気消して」等、少なくとも名詞と動詞は含まれていて、一応意味の通じる発話だった。しかし、実験に入ると、この5名はいずれも、動詞は出なくなり、助詞も2名だけに助詞「ト」が見られただけだった。B-2での発話を例にあげてみると、

A: 1. 風船

2. 風船

3. 風船

C: 1. キツネ

2. タヌキとキツネ

3. ウサギとキツネ

というように、名詞の羅列のようだった。着目するキャラクターについても、メインになるものがりんごであったり、風船であったりと、普通児にはない傾向が見られた。

対象児F・Gについては、実験でも動詞がはっきり出ていた。同じようにB-2での発話をあげてみると、

G: 1. キツネが 風船 もっている

2. タヌキと キツネが 風船 もっている

3. ウサギと キツネと 風船 もっている

というものだった。FもGも1枚目についての発話だけを見ると、5~6歳児程度の発話に相当する。しかし、2枚目3枚目になると、どちらも普通児には見られなかった独特のパターンになっている。絵カードとは関係なしに、上記の2や3の文を見るとおよその意味はわかるのだが、絵と照らし合わせてみると、B-2の場合「アゲル」「ヤル」などの

視点動詞が必要と考えられ、FやGの発話では不十分である。他にもA-1・A-2・B-1と、やりもらいの関係を含んだ絵があるが、対象児A~Gの発話の中には1つも視点動詞が含まれていなかった。この7名が視点動詞を習得しているか否かを調べてみる必要はあるが、ここで視点動詞が使われていないのは、絵の中での物の移動を推測できていないためではないだろうか。普通児では、前後の関係、キャラクターの動作の違い、自分の経験から、容易に「アゲル」という動詞を使っていた。しかし、その「アゲル」という動作は、絵を見て推測した動作である。FやGの場合その推測がなされず、絵の状況を忠実に表そうとしたために、「モッテイル」という動詞を使うことになったのではないだろうか。

b) 自閉児2 (H・I) について

対象児HとIは、2人とも今では普通学級だけで教育を受けているほどなので、自閉児1に比べるとずっと自然な会話が成り立ち、話す内容にも幅があった。このことは、図1の87%という成人に次いでの高得点率からもわかるだろう。

HとIについてはA~Gに見られたような助詞や動詞の欠如はなく、文法的な誤りもなかった。それでも誤反応が11%もあったのは、「ハ」と「ガ」の使用で2人とも同じような反応があったからである。各組の1枚目で描かれているキャラクターはすべて新情報なので「主語+ガ」を使用すべきところなのだが、Hの場合「主語+ハ」が6組中3組、Iの場合は6組中2組あった。「ハ」と「ガ」の使用については、小学校高学年でもまた不完全であると前述したが、それは、「ハ」を使うべきところで「ガ」を使ってしまうということであり、その逆は1つもなかった。したがって、この自閉児2の誤反応は全12組中5組と決して少ない数ではなく、独特なものといえよう。

視点・語順については完璧で、省略については1人1ヶ所ずつ不適切な省略を行っていたが、他は適宜主語の省略をしておき、「ハ」の使用以外については、新・旧情報を意識した発話だった。

(3) 自閉児と普通児との比較による新・旧情報

以上、普通児の新・旧情報、自閉児の新・旧情報について述べてきたが、(3)では双方の比較から、更に自閉児の新・旧情報における言語特徴をクローズアップしていくことにする。

ここまで自閉児を、自閉児1と2に分けて考察してきたが、(3)では更に自閉児1を反応パターンにより2つに分けて考察していく。

自閉児1-1 反応文に動詞がない

自閉児1-2 反応文に動詞がある

まず、自閉児1-1は、自発語では動詞もはっきりと出ていたのに、実験になると絵に描かれているキャラクターの名前だけ(パンダ、キツネ)で終わってしまい、それらの動作、状況、表情等については全然触れていなかった。このような発話は4、5歳児にも見られたが、普通児と違う点は、3枚を通して風船やりんごだけに固執してしまうという例がいくつかあったことである。一般に自閉児の言語特徴として、自分が興味をもったこと

ばかり話すということがあげられるが、3枚を通して「風船」とだけ言うというの、絵の中のパンダやそれ以外のものには目もくれず、風船にだけ興味をもったためとも考えられるし、また、絵を見て話すということに無関心だったため「風船」だけで終わりにしてしまったのかもしれない。どちらにしても、実験者が促してもそれ以上の発話がなかったということも含めて、このパターンは自閉児独特のものと考えられる。

次に、自閉児1-2についてであるが、彼らは自閉児1-1に比べてずっと文がしっかりとしていた。しかし、(2)-aでも述べたように「アゲル」という視点動詞が1つもないために、3枚の流れの中では不適切な文となっていた。視点動詞の中でも「アゲル」・「クレル」は「モラウ」よりも習得が早いとされ (Uyeno, et al., 1978)、普通児では4歳児でも「アゲル」を多用していたのだが、自閉児1-2では全然見られない。これは「アゲル」を習得していないためとも考えられるが、それよりも、物の移動が推測できていないためではないだろうか。また、文頭で“一と一が”パターンを使っているために、自然と一般動詞の「モッテイル」等が使われるのではないだろうか。“一と一が”パターンを使っていることから、視点がどちらにも置かれていない、つまり、新・旧情報を意識していないと考えられる。しかし、対象児Fの発話でB-3の1枚目において、

パンダ 風船 もっていません

という普通児には見られない文があった。これは、A-2のパンダが風船を持っている絵を意識したものである。したがって、新・旧情報が全然意識されていないわけでもないようである。つまり、自閉児1-2では、3枚1組内での新情報・旧情報という枠組みを越えている場合もあれば、同じ枠内でも新・旧情報が意識されず、現在見ている1枚の絵だけから判断して文を作る場合もあり、3枚1組という枠組みを理解していないようである。普通児では幼児でも、2枚目3枚目に移る時に、「それで」「今度は」等を入れて、前の話の続きであることを表そうとしているものが多かった。

自閉児2で問題となるのは、主語が新情報である場合の「主語+ハ」の使用についてである。「ハ」と「ガ」の使われ方の違いについては新・旧情報以外にもあるが、新・旧情報だけでいった場合、「ガ」は「ハ」よりも早く習得される。このことは図2からもいえる。つまり、「ガ」が早く習得されるために、「ハ」を使うところでも「ガ」を使ってしまうということは、小学校レベルまでよくあることだが、その反応はほとんどない。「ハ」を用いるようになった段階での「ハ」と「ガ」の混同は、少なくともこの実験では見られなかった。普通児では見られなかった混同が自閉児2であったわけだが、これはなぜだろう。1つ考えられることは、彼らは「ハ」「ガ」を習得するのに、普通児のような段階を踏んでこなかったのではないかということである。つまり、「ハ」と「ガ」を同じような時期に習得したために、混同が生じているのではないだろうか。これは、突然敬語を使って話した自閉児の例などからいっても考えられることである。しかし、自閉児2はわずかに2名と少ないデータであるので、このことを検討していくためには、更に多くのデータが必要である。

4. ま と め

本研究により、自閉児と普通児における新・旧情報について、以下のことが明らかになった。

- 1) 普通児の場合、新・旧情報について幼児でも意識しているが、幼児がそれを表現するには、語順や省略に頼るところが大きい。小学生になると、旧情報を主語とする方法が盛んにとられるが、その場合「ハ」と「ガ」の使い分けがまだ不完全である。成人になると「ハ」「ガ」を新情報か旧情報かによって使い分け、また、適当な省略により要領よくまとめた文を作るようになる。
- 2) 自閉児の場合、それぞれの発達段階によって差があり、この実験では、新・旧情報に無関心な群、新・旧情報を3枚1組の枠内でとらえられない群、新・旧情報を理解していると思われる群に分かれた。3枚1組の枠内でとらえられないということは、与えられた条件（環境）に見合った反応ができないということであり、これはやはり語用論的な障害があるといえる。新・旧情報を理解していると思われる群に関しては、本研究では特に「ハ」と「ガ」の混乱が目についた。これは「ハ」と「ガ」を習得するのに、普通児のような段階を経っていないのではないかと考えられるが、この点を明らかにするには今後の研究にまたなければならない。

謝 辞

本研究の調査実施にあたり、神奈川県立鶴見養護学校の遠藤先生をはじめ諸先生方、横浜市立綱島東小学校の木村先生、私立青葉幼稚園の諸先生方には大変お世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。また、本研究に協力してくださった児童・生徒・園児の皆さんの健やかな御成長をお祈りいたします。

文 献

- Cunningham, M. A. 1968
A comparison of the language of psychotic and nonpsychotic children who are mentally retarded. *J. Child Psychol. and Psychiat.*, 9, 229-244.
- 林部英雄 1979
文における既知情報と新情報の弁別に関する発達的研究, 特殊教育研究施設報告, 22.
- 林部英雄 1983
文における新・旧情報の弁別に関する発達的研究, 心理学研究, 54, 135-138.
- Hintgen, J. and Bryson, C. 1972
Recent developments in the study of early childhood psychoses: infantile autism, childhood schizophrenia, and related disorders. *Schizophr. Bull.*, 5, 8-55.
- Ishiguro, H. 1985
Point of view in children's discourse. *Descriptive and Applied Linguistics (ICU)*, 18, 97-108.
- 石黒広昭 1985
テキストの組織化における視点の役割, 教育心理学研究, 33, 1-5.
- 伊藤武彦・林部英雄・石黒広昭・町田重光 1985
言語発達研究への機能主義的アプローチ, 心理学評論, 28, 280-305.

- 久野 暲 1978
談話の文法, 大修館書店
- 村田豊久 1980
自閉症, 医歯薬出版
- Rutter, M. 1966
Behavioural and cognitive characteristics of a series of psychotic children. In Wing, J. K. (Ed.) *Early Childhood Autism: Clinical, Educational and Social Aspects*. Pergamon Press.
- Savage, V. A. 1968
Childhood autism: A review of the literature with particular reference of the autistic child. *Brit. J. Disord. Commun.*, 3, 75-87.
- Uyeno, T., Harada, S. I. Hayashibe, H., and Yamada, H. 1978
Comprehension of sentences with giving and receiving verbs in Japanese children. *Annual Bulletin RILP*. (Univ. Tokyo), 12, 167-185.
- 若林慎一郎 1982
自閉症児の発達, 岩崎学術出版
- Wing, L. 久保・井上訳 1976
早期小児自閉症, 星和書店